

大正帝都の灰かぶり姫 孤独な少女は至幸の愛を知る

朝永ゆうり Yuuri Tomonaga



アルファポリス文庫

序章 中條公爵家のご子息殿

帝都の街は、今日も賑やかだ。

屋敷の前に集まった新聞記者たちを執務室の窓から見下ろしながら、中條公爵家の子息である鷹保はため息をこぼす。すると、窓ガラスがほんのり曇った。

（これだけ寒い朝なのに、記者たちはご苦労なことだ）

昨夜、夜会で知り合った名前も知らぬ令嬢を自宅へと送り届けた。たったそれだけのことなのに、記者たちは自分を『帝都一の色男』だと騒ぎ立てる。

彼は皮肉るような笑みを浮かべた。

（愛だの恋だの、くだらない。人はいずれ、変わってしまうというのに）

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」

鷹保はそう呟くと執務室の大きな椅子に腰かけ、先ほどまで読んでいた本を再び開いた。父親を殺され母親を奪われ、復讐に燃えた孤独なデンマークの王子の話だ。

（死を選ばずに復讐が果たただけ、彼は報われたのかもしれないな）

そう考えると、自分は情けなく、同時に生きることが阿呆らしくなってくる。それでも生きていなければならないのだから、世の中とは無情である。復讐をしたいとは思わない。憂き世に流されて生きてゆけば、人はいつか忘れる。だから自分は、その時を静かに待つだけ。

だが鷹保は、己おのれの中に棲みついたこの考えを改めることになる。
ある日突然現れた、一輪の美しい花を手にしたことで――

第一章 帝都の狼たちと純朴娘

「ここが、帝都……」

雪が解け花たちが芽生える、始まりの季節。終点の上野で汽車を降り、駅舎を出たところでハナは立ち止まった。

幅の広すぎる道の左右に立ち並ぶのは、西洋風の石造りの建物。空に張り巡らされている黒い線の中には、電気というものが通っているらしい。道端に立つ柱はガス燈といつて、夜になると街を照らすと聞いたことがある。

行き交う人の多さに圧倒されたが、それ以上にみな洋装であることに驚いた。

殿方は帽子を被り、杖と鞆を持っている。貴婦人は厚みのある布でできた丈の長いドレスを身にまとっているが、膝丈ほどの動きやすそうな洋装で、つばのない不思議な形の帽子を被っている婦人もいる。

ハナと同じくらいの年齢の女性は着物の人も多いが、その髪は大きな布で結われていたり、丁寧に編み込まれたりしている。それに、袴の下に見えるのは足袋ではなく洋風の履物だ。

（さすが帝都だわ。私なんて……）

ハナはちらりと自分の足元を見た。裸足に藁草履^{わらそうり}。薄桃色の色留袖^{いろとめそで}という一張羅を着てきたにもかかわらず、ハナはたつたひとつの持ち物である風呂敷包みを抱えたまま恥ずかしくなった。

ハナは田舎の村の出身だ。幼い頃から田畑を手伝い、冬は竹かごを編んで育った。

ハナに身寄りはない。母は産後の肥立ちが悪く、ハナを産んで間もなく死んだらしい。父親はそれよりもっと前に病気で亡くなったと聞いている。村の優しいおばあさんの家で暮らしていたが、そのおばあさんもひと月ほど前に亡くなった。

（村の人たちが、ひとりきりの私を手厚く育ててくださった。それに、ひとりで生きているようにと帝都での働き口まで見つけてくださった）

ハナは空を見上げた。ほんのりと紫を帯びた青に浮かぶ、いくつかの白い雲。建物や人の様子は違っても、空は村と同じだ。それに、父母や育ててくれたおばあさんとも繋がっている気がする。

（父母に恥じないように、村のみなに恩返しができるように。私はこの帝都で、立派に勤めあげるのよ）

鼻からすつと息を吸い込み、決意を新たに吐きだす。よし、と気合を入れてから、帝都への一步を踏みだした。

（次は、しでん^{しでん}に乗るのよね）

ハナは辺りを見回して、電気で走るといふ乗り物を捜した。するとその時、ぶおんぶおんという聞き慣れない音がして振り向いた。

馬のない馬車のような四輪の真っ赤な乗り物が、ものすごい速さでこちらに駆けてきている。

「わあっ！」

慌ててその乗り物を避けたが、尻もちをついてしまった。同時に、後ろから出ていた黒い煙を吸い込んでしまう。油のような変わった臭い。ハナはその場で咳き込んでしまった。

すると今度は、右肩に突然痛みが走る。

「なんだ女か。こんなところに座るな、邪魔だろう！」

「あ、あの、すみま……」

どうやら、道行く男性に肩を蹴られたらしい。男性はそのまま行ってしまう、ハナの言葉は都会の喧騒にのまれていった。

（こんなことで、めげていてはだめよ）

こぼしかけたため息をぐつとのみ込む。すると、目の前に黒い影がすつと落ちてきた。「大丈夫かい、お嬢ちゃん」

低く温かみのある声が頭上から降ってくる。顔を上げると、大きな手が差し伸べられていた。

手の主の足元は下駄、その上は濃い灰色の柔らかなズボン。視線を上げると、白いシャツのボタンを三つほど外した、洋装なのに柔らかな姿の男性と目が合った。

ハナとひとりは離れているだろうか。背が高く顎髭が印象的な彼はやたら男性らしいが、こちらに向ける笑みは優しい。

「ありがとうございます」

言いながら、差しだされた手に手を伸ばす。すると、ぎゅっと手を握られた。節くれ立った大きな手の温もりに、ハナの頬はほっと熱くなる。

男性はハナの手を引っ張り立たせると、足元に落ちていた風呂敷包みを拾いあげハナに手渡した。

「気をつけな。帝都の人はみな狼。誰も信用しちゃあいけない」

「え？」

「じゃあな。達者で、お嬢ちゃん」

ハナの声など聞こえなかったかのように、男性はくるりと背を向けて行ってしまった。

（優しくて、不思議なお方だったわ）

風呂敷包みを抱えたまま、ぼうっと彼の背を目で追う。しかしすぐ、自分がなにをしに帝都にやってきたのか思いだした。

勤め先の客亭は、上野から市電を乗り継がなくてはならない。初日から遅刻しては、先ほど立てた誓いも意味がない。

「宝華亭に、急がないと」

ハナは目的の乗り物を見つけると、慌てて駆けだした。

市電を降り、大通りを一本入った閑静な場所に宝華亭はあった。

（ここが、今日から私が働く場所なのね）

なんて立派な客亭だろう。ハナは大きな門の前で立ち止まり、宝華亭を見上げた。そびえ立つ白壁、瓦を重ねた大きな屋根。ハナの住んでいた田舎では、とても想像できない大きさだ。

（きつとたくさんのお客様が泊まりにいらっしやるんだわ。頑張らないと）

ハナは風呂敷包みを持つ手にぐっと力を入れ、宝華亭の敷地に足を踏み入れる。意気込みと緊張を胸に、正面の大きな戸口をがらがらと開いた。

「ごめんくさーい」

ハナは最初が肝心だと、大きな声ではきはきと言った。田舎育ちのハナは、広い田

や畑で大声で人に呼びかけることがしばしばあった。だから声はよく通るほうだと思う。

しかし、中にいる女性たちは慌ただしく動き回っているばかりで、誰もこちらには見向きもしない。

「あ、あの――」

前掛けをした女性が近くを通った時、ハナは彼女を呼び止めようとした。しかし盆を持った女も箒を抱えた女も、誰もハナに気づかない。

彼女たちはこの客亭の女中なのだろう。仕事にひたむきなのは素晴らしいが、今のハナには少し困りものだ。

奥からは「植木は確認したのかい!」「あっちの塵を早く片づけろ!」と次々に怒号が飛び、それに答える女の声が響いている。

ハナは思いきり息を吸い込み、もう一度大声を出した。

「すみませーん!」

すると今度は、中にいる全員がこちらを一齐に見た。

思わずぴくりと体が震える。立ちすくんでいると、背筋のぴんと伸びた白髪的女性が奥から現れた。彼女のまとう鶯色うぐすの色留袖は、金色の絵羽模様が美しい。きつと高価なものなのだろう。

「ぼさっとしないで仕事に戻りな」

彼女は動きを止めた女性たちに厳しい声でそう言うのと、ハナの前へやってくる。彼女の眼光は鋭く、ハナはごくりと喉を鳴らした。

「なんだい、この忙しい時に」

女性はどうやら偉い人らしい。ハナが怯んでなにも言えないわずかな間にも、数人の女中に指示を飛ばしている。

ハナは緊張で速まる鼓動を落ち着かせようと一度深呼吸をしてから、はっきりと言葉を紡いだ。

「今日からここで働かせていただきます、ハナと申します」

「ああ、お前さんか」

女性には面倒くさそうにそう言うと、ハナをつま先から頭のとっぺんまで吟味するように見る。ハナは思わずぶるりと震えたが、彼女はなんでもないように「悪くない」と独り言ちた。

その時、ひととき大きな声が響いた。

「女将様、財前様さいぜんが到着されました」

すると、目の前の女性が途端に声を張りあげる。

「お前たち、早く並びな! お迎えするよ」

女中たちがばたばたと、こちらに駆けてくる。

「あの、私はどうしたら——」

ハナは当惑し、すぐる思いで女将を見つめた。すると腕を引っ張られ、女将の隣に立たされる。

「お前はここだよ」

女将の厳しい口調に思わずひつと肩をつり上げたが、すぐに目をまたたかせた。

目の前の女中たちは前掛けを外し、入り口を挟んで二列に並んでいる。彼女たちの髪はいつの間に整えたのか綺麗にまとめられていて、しかも全員が凜とした笑みを浮かべている。先ほどまでのばたばたが嘘のようだ。

（すごい！これが帝都なのね）

驚嘆したが、同時にこれから自分もここに入っていくかなくてはならないという不安が胸に渦巻く。俯いていると、女将の小さいが鋭い声が真横から飛んできた。

「なにぼさっとしているんだい、早く頭を下げな」

周りを見ると、女中たちはみな低く頭を下げている。ハナは足元に荷物を置き、慌てて頭を下げた。

するとすぐ、戸の開く音がした。続けて、かつ、かつと、聞き慣れない音が聞こえる。ハナは緊張したが、同時にそわそわと気持ちが高まった。

（帝都は履物の音まで違うのね）

やがて視界に入ったのは、足の先まですっぽりと覆われた茶色い革靴だった。革靴の名前を聞いたことはあっても、こんなに間近で見るのは初めてだ。

「財前様、本日もようお越しくださいました」

女将がそう言うのと、革靴の上から男性の声が聞こえた。

「今日は用事が早く終わったんで、ちいと様子を見に来てみたよ」

「ありがとうございます。財前様にご晶屑にしてくださいだきうちも——」

女将と財前と呼ばれた男性の会話が聞こえるが、ハナは目の前の茶色い革靴に夢中だった。先端についている穴のような飾りも、足首まで縛りあげる黒い紐も、すべてが帝都らしくて華やかだと思う。

（財前様、どんなお方だろう。こんなに洒落た靴をお召しなんだもの、きっと財力があって、性格もよくて、素敵な殿方に違いないわ）

ハナは胸が高鳴るのを感じた。女将と財前は、まだ談笑を続けている。
（ちょっとだけなら、許されるわよね）

少しだけ。そう言い聞かせ、ハナはわずかに頭を上げた。

しかし、すぐに後悔した。財前とばかり目が合ってしまったのだ。

財前は小太りで細い目をした、中年男性だった。つややかな髪は、きのこのかさの

ような形に切り揃えられている。

「初めて見る子だね」

財前は再び革靴の音を響かせながら、ハナに歩み寄る。

「こら、お前は！」

耳元で女将のなじる声が聞こえたが、ハナは動けなかった。背を嫌な汗が伝う。

財前が氣立てのよさそうな笑みを浮かべているのが救いだ。ハナも慌てて口角を引きあげた。

「へえ、可愛い顔だ」

財前はそう言うときにやりと白い歯を見せ、右手でハナの顎をくいっとすくい上げる。途端に、ハナは自分の心臓の音が変わるのを感じた。彼の笑みが悪人のそれに見えたのだ。ぞわりと、全身に鳥肌が立つ。

「決めた。今日の相手は彼女にしよう」

財前はそう言うときハナの顎から手を離し、代わりに肩を組むようにその手をハナに伸ばした。

「財前様、彼女は新入りでして教育もなにもしておりません」

女将が慌てたようにそう言ったが、財前はにたと笑みを浮かべ続ける。

「構わないさ。なにも知らないなら、僕が手取り足取り教えるまでだ」

「財前様がそうおっしゃるなら……」

女将は財前の笑顔を前に引き下がり、苦虫を噛み潰したような顔をした。

「いつもの、奥の座敷で待っているぞ」

財前はそう言うとき、一度ハナの肩をぎゅっと強く抱き、客亭の奥へと消えてゆく。

何人かの女中がついてゆき、他の女中はどこかへ散っていった。

おろおろしていると、女将に腕を強く掴まれる。そのまま体が回転し、ハナは女将と正対した。

「まったく、とんでもないことをしてくれたね」

先ほどの穏やかな笑みはどこへやら、女将は鬼の形相でハナを睨む。

「財前様はうちのお得意様なんだ。絶対に失礼なことをするんじゃないよ！」

あまりの気迫にこくりと頷くと、女将はハナの腕を放した。それから、ハナの背をばしと叩く。

「ぼさっとしてないで早く行きな。財前様を待たせるんじゃないよ」

ハナは急いで足を踏みだそうとしたが、一度女将を振り返った。

「あの、どちらに伺えば……?」

「この廊下を真っ直ぐの、一番奥の大きな部屋だよ！」

おそろおそろ聞くと、すぐに女将が怒鳴る。ハナは自身の荷物をそこに置いたまま、

早足で客亭の奥へと向かった。

財前のいる部屋の前で正座をする。一度呼吸を整えてから、ハナは襖の向こうへ声をかけた。

「失礼いたします」

そつと襖を開けると、財前は敷かれた布団の上にあぐらをかいて座っていた。

「お、来たね」

彼は満足げに微笑んでおり、ハナは背筋が寒くなるのを感じた。だけど、失礼があつてはいけない。彼は宝華亭のお得意様なのだ。

ハナは入り口に近い畳の上に移動すると、開けた襖を丁寧に閉めて財前に向き直った。

「君、名前は？」

「ハナと申します」

言いながら、指の先を揃えて頭を下げる。

「ハナちゃんだね、よろしく。そんな端っこにいないで、こっちにおいで」

財前にはやにやしたまま、ハナを手招きした。

ハナは狼狽えた。お客様の布団に上がるのはよくない。なにもできないでいると、財前がそんなハナを見て口を開いた。

「もしかして、ハナちゃんはここでなにをするのか知らないのかな？」

財前は上げていた口角に、より深く皺を寄せる。ハナは身の毛がよだつを感じながら、こくりと頷いた。緊張で肩がつり上がる。

「そうか、なら特別に僕が手を引いてあげよう」

財前は立ちあがると、座ったままのハナの手を掴む。そのまま布団の上に再びあぐらをかいて座り、ハナを自分の横に座らせた。

ハナは唾をのみ込んで、湧きあがってくるぞくぞくとしたなにかを抑え込んだ。財前は掴んだままのハナの手の甲を、反対の手でそわそわと撫でている。

「ハナちゃんの仕事は、この布団の上で僕に奉仕することだ」

「え……?」

「それって――」

聞いたことがある。帝都には、金持ちの男性のお世話をする「遊女」という仕事があることを。

（宝華亭は客亭だと聞いていたけれど、もしかして、そういうことをするところなの？）
自分が紹介されたのは、そういう仕事だった。その事実をやつと気がつき、ハナの体は強張ってしまう。そんなハナの顔を、財前にはたいたまま覗き込んだ。

「大丈夫さ、手取り足取り教えてやると言っただろう」

財前はハナを撫でていた手を、ハナの腰に移した。触れられたところが気持ち悪い。それでも、ハナは湧きあがる嫌悪感を必死にのみ込んだ。

失礼があつてはいけない。彼はお得意様であるし、それにたとえ「遊女」だとしても村の人たちが見つけてくれた仕事だ。先ほど、帝都で立派に勤めあげようと決めたばかりだ。

「恥ずかしがつているのかい？ 初心^{うぶ}なところも可愛いねえ」

動けないハナを見て、財前はそう言った。それからハナの腰を浮かせ、自分の膝の上に座らせる。

見た目はぼつちやりしているが、意外と筋力もあるらしい。軽々と持ちあげられてしまったことに、ハナは恐怖を感じた。

このまま、どうされてしまうのだろう。考えてもどうしようもないことを考えてしまい、ハナの体はいっそう硬直する。

するとハナが動かないことに氣をよくしたのか、財前が用意されていた徳利^{とくり}に手を伸ばした。

「お酒を飲もうか、ハナちゃん」

財前はそう言うのと、徳利をハナに持たせる。財前がお猪口^{ちよこ}を構えるので、ハナは斟酌した。

「はい」

恐怖で手が震えたが、なんとかこぼさずに御酌する。財前は注がれた酒を飲み干すと、ハナにも飲むよう勧めた。

「今回は僕が御酌してあげるよ。特別だよ？」

財前は白い歯をちらつかせながら、先ほど自分が使ったお猪口をハナに持たせる。それからすぐ、お猪口に酒を注ぎ入れた。

しかし、財前は徳利を持つ手を大袈裟にハナのほうへ傾ける。それで、ハナの着物の半衿^{はんきん}が酒に濡れてしまった。色留袖の下のおろしたての長襦袢が肌に張りついて気持ちが悪い。

「おっとっと。ごめんねえ、ハナちゃん」

財前はそう言いながらも、酒のこぼれた胸の辺りをじっと見てくる。

（我慢するのよ、ハナ）

失礼のないように。村のみなのため、父母やおばあさんのためにも。ハナは自分に言い聞かせ、無理やり口角を引きあげる。

「いただきますね」

ハナは引きつった笑みでそう言うのと、お猪口を口元に運んだ。

「うーん、やっぱりそれ、僕に飲ませて？」

飲む直前で言われ、ハナは財前にお猪口を差し出した。

「どうぞ」

「違う違う」

財前はお猪口をハナに押し戻す。

「ハナちゃんに口に含んだよ。それを、僕の口に流し込んでくれればいいんだ」
(それはつまり、接吻をしることよね)

胸を叩く心臓の音は、どくどくと嫌な拍子を刻む。それでも、ハナは言われた通りにするしかない。財前はお得意様の客人だ。無礼を働くわけにはいかない。

ハナは言われた通り、酒を口に含んだ。苦くて、美味しくない。今すぐ吐きだしたい。泣きそうになってしまい、目に力を込めてこらえた。すると鼻の奥をどろりとしたなにかが流れ、少しだけ酒を飲んでしまった。喉が焼けるように熱い。

だがそんなことはお構いなしに、財前はハナに顔を近づけてくる。
(こんなことは、好きな殿方とするものとはかり思っていたわ)

財前は目を瞑り、蛸たこのような口でハナに迫っている。ハナも、ぎゅっと目を瞑った。
(どうにか耐えるのよ、ハナ)

しかしハナは耐えきれなかった。唇が触れそうになる気配を感じ、思いきりその身を引く。しかし腰を抱かれていたハナは、財前から逃れることはできなかった。頭が

真っ白になり、つい手を振りあげる。

——ばちん！

ハナはそのまま、財前の頬を思いきり叩いてしまった。

すると財前は、頬を赤くして目を見開く。じんじんとした手の痛みを感じ、ハナは我に返った。

(しまった！)

財前の顔はみるみる怒りに満ち、眉ががり上がる。顔全体が赤くなり、眉間やもみあげの辺りには青筋が目立っている。

「お前、この僕を……！」

ハナは謝らなくてとはと、財前の膝の上から慌てて飛びのいた。財前から十分に距離を取った畳の上に、額をつけて土下座する。

「申し訳ございません！」

帝都で立派に勤めあげると決めたのに、これでは元も子もない。自分の至らなさと悔しさに、視界がじわりと滲む。

どうにか許していただきたい。だがそんな願いも虚しく、財前はハナを罵倒しながら立ちあがる。

「なんて無礼な女中だ！ 僕を誰だと思っている！」

財前の激昂した声が聞こえたと思ったら、脳天を鈍い痛みが襲った。財前がハナの頭を蹴飛ばしたのだ。

「きゃあ！」

ハナがのけ反り倒れると、財前はハナの前髪を掴み、引つ張りあげるように起きあがらせる。

「お前のせいで、僕の頬はこんなんだ！」

財前は唾を飛ばしながらハナに怒鳴った。思わず顔をしかめると、財前は掴んでいたハナの前髪をぽいと放す。ハナはもう一度畳に倒れ込んだ。

「もうこの店には来ないよ！」

財前は勢いよく襖を開けると、そのまま大股で廊下へと出ていった。

「財前様、お待ちください！ 一体なにが!？」

廊下から女将の叫び声が聞こえる。

（どうしよう、大変なことをしてしまったわ）

ハナは涙が滲んだ目元を拭いながら、慌てて立ちあがった。財前に謝り、彼を引きとめなくては。自分がしてしまったのだから、自分でなんとかしてはいけなかった。

ハナは奥の座敷から、財前が去っていった後を追いかける。客亭の入り口まで走っ

たところで、財前の後ろ姿が見えた。

彼のすぐ後ろには女将がいて、彼を引きとめようとしている。彼女の必死の形相に、ハナは血の気が引いていくのを感じた。

（私のせいで、なんてことに……）

だが、悔しがつてばかりでは仕方ない。ハナはなんとしても財前に謝らなくてはと、その時を見計らった。いくら嫌な思いをしたからとはいえ、大切なお客様を叩いてしまったのは自分だ。

しかし、ふたりの押し問答は終わらない。

「どうかお待ちください、財前様」

「この店はもう終わりだな！」

そんなふたりの様子に、ハナはもうだめだと下唇を噛んだ。心咎めが襲い、胸がずきずきと痛む。

その時、入り口の引き戸が開いた。新たな客が来たらしい。だが女将は財前の対処に必死で気づいていない。

（どうしましよう、お客様が）

気づいているのは自分だけ。そう悟り、ハナは客になにか言おうと戸口を振り向いた。目を見張った。言葉も出てこなくなってしまう。

見たこともないような美男子が、そこに立っていたのだ。細身の体にびったりと合うよう仕立てられた背広は、柔らかい輝きを放つ焦茶色。彼が頭に乘せているものは、シルクハットという帽子だろう。背広と同じ色で、控えめに光っている。

帽子的下は、柔らかく癖のある黒髪。二重まぶたの奥には、薄く澄んだ茶色い瞳があった。筋の通った鼻。優しく控えめに綻ぶ口元。彼のすべてが整っている。

（恰好いい殿方……）

思わず見惚れてしまったが、慌てて彼が見ているほうへと視線を戻した。財前と女将が、まだ押し問答をしている。

「二度と来ないからな！」

財前は言いながら、やがて戸口に達した。そのまま、先ほどの彼の横を通り過ぎようとする。美男子の前では、財前はまるで冬に向けてずんぐりと脂肪を蓄えた熊のようだ。

「財前侯、どうした？」

すれ違いざま、美男子が野良熊に淡々と声をかける。

「ちゅ、中條公爵のご子息殿！」

財前は目をまたたかせ、急に背筋をしゃんと伸ばした。

「その名で呼ばれるのは好きではない」

美男子はわずかに顔を歪めてそう言った。

財前は先ほどまでとは打って変わって笑みを浮かべ、手でごまをする。

「失礼いたしました、鷹保殿」

すると、鷹保と呼ばれた美男子の伶俐な顔が陰しくなった。

女将はすぐに、その顔に笑顔を張りつけ鷹保に話しかける。

「鷹保様、お出迎えもせず大変失礼いたしました。すぐに最上級のお部屋を——」

「いや、いい。通りまで声が聞こえて、珍しいと思って寄っただけだ。採め事か？」

鷹保は言いながら、女将をじつと見た。女将はまごついてしまう。すると鷹保の視界にまったく入っていないにもかかわらず、財前が大きな声を上げた。

「実は、あの女が僕に手を上げてね。女中が暴力を振るうなど、この客亭の品位に関わると忠告していたのですよ」

鷹保はその言葉に再び眉間に深く皺を刻み、ちらりと財前を見る。それから、彼の指の先を視線で辿った。

目が合いそうになり、ハナは視線を逸らした。それでも、鷹保の視線がちくちくと刺さる。

「ましてやここは中條公爵のお膝元。なにか問題が起きたら、鷹保殿にとってもご迷

惑でしよう?」

財前の言葉に、取り返しのないことをしてしまったと改めて思い知らされ、ハナの顔から血の気が引いていく。

だが、鷹保が次に放った言葉は意外なものだった。

「面白い」

(え……?)

ハナは思わず視線をもとに戻す。鷹保は愉快だと言いたげに口角を上げ、こちらを見ていた。

目が合った瞬間、彼は目を見張る。しかしそれは一瞬で、鷹保はすぐに女将に視線を戻し、口を開いた。

「女将。その女、私に譲ってくれ」

鷹保の言葉に、女将は狼狽えた。

「鷹保様、彼女はまだ新人でして——」

「構わない。気に入ったんだ」

鷹保は強い口調でそう言うのと、もう一度ハナを見た。今度はばつちりと視線が合い、合ったついでに彼の口元がかすかに弧を描く。

ハナはわけが分からず、首を傾げた。

「ですが……」

女将はまだまごついていいる。すると鷹保は、女将のほうへと足を向けた。

鷹保は女将の耳元でなにかを囁く。途端に女将は目をまたたかせ、その額に脂汗を浮かべた。

「鷹保殿、その女は目の色も普通でない上に、男に手を上げる。もらったところで使道もないですよ」

ふたりの様子を見ていた財前が、嫌そうな顔をして言う。

「さあ、どうかな」

鷹保はそう言うのと、ハナの前にやってきた。美しいその男は、そのままハナに右手を差します。

「おいで、おひいさま」

「あの、えっと……」

ハナは戸惑った。

彼はきつと助けてくれたのだろう。だけど、もとはといえば自分が悪い。それをそのままに、この人の手を取るなんていいのだろうか。

ためらっていると、鷹保は優しい笑みをハナに向けた。

「おひいさまの居場所は、こっちだよ」

彼の笑みはハナの心にすっと入り込み、ひと筋の光をくれるよう。だけど、宝華亭のことも、財前にしてしまったことも気になる。

ちらりと女将を見ると、彼女はどこかへ視線をさまよわせていた。

「さっさとお行き」

女将が小声でそう言う。すると、鷹保はハナの手をそっと握った。

「ほら、大丈夫だ。こっちにおいで」

鷹保の言葉に、ハナは覚悟を決めた。彼の手を握り返す。すると鷹保は満足そうに微笑み、不請願の財前に向かって言った。

「財前侯。私はね、レディーに対してはいかなる時も紳士的であるべきだと思うよ」

「な……！」

鷹保の言葉に、財前は顔をしかめた。その顔は、今にも怒りが灯りそうだ。

思わず身を震わせたその瞬間、鷹保はハナの手をぎゅっと強く握る。それからくりと体の向きを変え――

「走るよ！」

――そう言って、宝華亭から駆けだした。

どのくらい走ったのだろう。細い路地を入ったところで、鷹保は急に速度を落とした。

「ここまで来れば、もう大丈夫だろう」

ハナは肩で息をしながら、繋がれたままの手を頼りにふらふらと鷹保について歩く。

「あの……ありがとう、ございました……」

息を切らしながら礼を伝えると、鷹保が立ち止まって振り返る。かなり走ったにもかかわらず、彼はいたずらが成功したような、満足そうな笑みを浮かべていた。

「その履物で私と同じ速度で走れるなんて、おひいさまの脚は屈強だねえ」

ハナは自分の足元を見た。裸足に藁草履。帝都にそぐわない恰好に急に恥ずかしくなって、ハナはそのまま顔を上げられなくなった。

鷹保はくつくつと喉を鳴らして笑っていたが、しばらくすると笑いを収め、どこかに向かって声を上げる。

「じいや、いるんだろう？」

「ぼっちゃん、こちらに」

低く静かな男性の声がしたが、それは鷹保のものではない。振り向くと、黒の洋装に白い手袋をはめた細身の年配の男性が立っていた。

「馬車は、あちらの通りに止めてあります」

「ああ」

鷹保はそれだけ言うと、ハナの手を引いて歩きます。ハナはされるがまま、鷹保に

ついていた。

鷹保は入ってきたのとは反対の方向へと路地を進み、やがて大きな通りに出る。ここには立派な馬車が止まっており、ハナはつい目を見開いた。

深緋色の馬車には金の装飾が施され、四方にガラスの窓がついている。車輪にも金の装飾が施されたそれは、まるで動く美術品のようだ。

呆気に取られているうちに、鷹保は馬車へと乗り込む。

「おひいさまも、どうぞ」

彼はそう言うのと、ハナに手を伸ばし乗るよう促した。

絢爛な馬車の様子に恐縮しきっていたハナだが、乗ってみると心地よかった。座席に腰を下ろすと、敷布団とかけ布団を十枚ほど重ねたような柔らかなさに包まれる。それに感動していると、からんころんというハイカラな音とともに馬車がゆつくりと動きたした。

「わあ……！」

思わず声がこぼれた。

ハナのいた田舎では馬車といえどもっぱら荷馬車で、砂利を弾く車輪の音はもっと鈍い。もっとも、その荷馬車も七日に一度ほどしか見ることがなかったのだが。

馬車の中は静かで、ハナは声を上げてしまったことを後悔した。自分が田舎者であ

ると言っているようで、恥ずかしい。

隣に座る鷹保をちらりと見たが、彼は黙ったまま窓の外をじつと見ている。ハナははっとひと息ついて、馬車の揺れに身を任せた。

だが、馬車の揺れに合わせて体が座席に沈み込むのを感じていると、心まで沈みそうになる。村のみなが自分のために紹介してくれた仕事では、大変な失敗をしてしまった。鷹保がいなかったら、今ごろどうなっていただろう。

（村のみなには申し訳ないけれど、この殿方が助けてくれたのは事実。今は、この方についてゆくしかないわ）

長い脚を組み優雅に外を眺める美男子の、楽しそうであり切なさでもある横顔を見ながら、ハナはそう自分に言い聞かせた。

馬車を降りたのは、立派なお屋敷の前だった。宝華亭とは異なり、西洋風の造りだ。鉄製の大きな門が背後で閉められる間、ハナはほうと息を漏らしながら、その左右対称の美しい城のような屋敷を見つめた。

（帝都のお屋敷って、どれもこんなに素敵なのね）

「おひいさま、こっちだよ」

鷹保はハナの手を取った。屋敷の美しさに圧倒され言葉を失っていたハナは、そのまま屋敷の中へと導かれてゆく。

入り口を入ると、目の前に大きな階段が現れた。鷹保はそれをどンドン上る。手を引かれ、ハナも彼に続いた。

赤い絨毯が敷かれた調度品の並ぶ廊下を進み、西洋風の戸を開ける。ハナが入ったことを確認すると、鷹保はぱたんと戸を閉めた。

ハナは部屋を見回した。壁は一面が書棚になっている。部屋の中央に大きな机があり、その手前に立派な革張りの長椅子が置かれている。

初めて見る洋風の内装に見惚れていると、鷹保はもう一度ハナの手を引いた。そして、革張りの長椅子へとハナをいざなう。

ハナは部屋を見回したまま、そこに腰かけた。すると突然、隣に座った鷹保がハナの肩に手を伸ばす。

「さて――」

（え……？）

そのまま肩を組まれ、ハナは鷹保と急接近した。

「楽しませてもらおうか、遊女とやら」

鷹保は艶やかな声色で囁くようにそう言うと、ハナの耳元に頬を寄せた。

思わず背を反らすと、鷹保と目が合った。彼は野獣のような瞳で、ハナをじっと見つめる。その口元は、妖しく弧を描いている。

ぞわり。ハナの背を、冷や汗が伝った。

（私、もしかして売られたの？）

そのまま頬をなぞられ、鳥肌が立つ。綺麗な彼の顔が、今は怖い。

「逃げられないよ、おひいさま」

鷹保が耳元で色っぽく囁く。ハナの肩を抱く彼の力は強く、とても逃げだせそうにない。

『帝都の人はみな狼』

帝都に着いた時に助けてくれた男性の言葉を、ハナは思いだした。その通りだ。

ハナはぎゅっと目を瞑った。心臓がどくどくと嫌な音を立てる。今にも涙がこぼれそう。

「その顔は、接吻の準備かな？」

鷹保は言いながら、ハナの唇に長い指でそっと触れる。彼の吐息が口元にかかり、鷹保の顔が目前にあることを悟った。するとなぜか、鼻の奥のほうがつんとする。

（だめだわ。やっぱり耐えられない……）

——ばちん！

気がつくのと、ハナは鷹保の頬を思いきり叩いていた。

はっとして目を見開く。鷹保は呆然とした様子で、ハナの叩いた頬にそっと触れて

いた。

（ああ、どうしましょう）

先ほどと同じことをしてしまった。ハナはそのことに青ざめたが、鷹保はなぜか目を細める。それから、くつくつと喉を鳴らして笑いだした。

「さすがだ、おひいさま」

（……え？）

鷹保の言動にぼかんとしたが、すぐに恩人を叩いてしまったのだと思います。

「すみません、私、つい叩いてしまいました」

「おや、謝るのか。嫌なことを嫌だと示しただけなのに、おひいさまは優しいねえ」
そう言うと、口角をにっと持ちあげる。鷹保はなぜか楽しそうだ。

「そんな優しいおひいさまには、褒美をやろう」

艶めかしい表情を浮かべながら、鷹保は指の背でハナの頬にそっと触れた。

「どうだい？ 今度は嫌なふうにはしないよ」

ハナは顔が真っ赤になるのを感じ、慌てて口を開いた。

「そ、そんなことは、していただかなくて結構です！」

早口でそう言い、ふいっと顔を横に向ける。

「それは寂しいねえ」

鷹保の声が急に弱々しくなり、ハナはつい彼に視線を戻した。鷹保は上目遣いで、こちらを見ている。

それで心臓がどきりと跳ねてしまった。艶めかしい所作がいちいち心臓に悪い。ハナは思わず声を荒らげた。

「からかわないでください！ それに私はおひいさまではなく、ハナという名前が——」

「女性はみな、おひいさまだよ」

鷹保は、ハナの言葉を遮りそう言った。彼は力のない笑みを浮かべ、どこか遠くのほうを見ている。その瞳には、かすかな陰が宿っているような気がした。

ハナは言葉を失った。

（どうして、そんなに寂しそうな顔をされるのかしら？）

すると鷹保は、再びくつくつと笑いだす。

「おひいさまは、面白いねえ」

（もう、一体なんなの！）

やはりからかわれていたのだと分かり、ハナの中に小さな怒りが芽生える。なにが言い返そうとしたその時、こんこんと扉を叩く音が聞こえた。

「ぼっちゃん。お部屋の準備ができました」

「分かった」

鷹保が答えると、がちやりと扉が開いた。振り返ると、先ほど鷹保を迎えに来た老紳士が丁寧に頭を下げて立っていた。

「おひいさまは、今日からこの女中だ。いいね」
「え？」

ハナは小さく疑問の声を漏らしたが、それは目の前の老紳士によってかき消された。「こちらへどうぞ。使用人の生活部屋に、案内いたします」

「あの、えっと……」

「行きなさい。それとも、私とともに夜を過ごしたいかい？」

振り返ったハナに、鷹保が色気をまとった笑みを向ける。

「い、いえ！」

ハナは慌てて前に向き直ると、老紳士について移動した。

通されたのは、先ほどまでいた洋館を出てすぐ右側の建物だった。使用人の住む棟は本邸とは別なのだと、老紳士が教えてくれた。

小さな戸口から入り、すぐのところにある細い階段を上る。細い木張りの廊下を進み、二つ目の扉を老紳士はこんこんと手の甲で叩いた。返事がないことを確認し、老紳士は扉を開ける。

「こちらがあなたのお部屋です」

手で指し示され、ハナは驚き目を見張った。

「ここが、使用人のお部屋なのですか？」

狭い部屋だが、そこには脚のついた寢床のようなものと机がそれぞれ二台置かれている。それらは対称になるように、左右の壁際にあった。間には小さな窓がある。片方には荷物があるから、誰かと相部屋なのだろう。

「はい、左様でございます。どうぞおかけください」

老紳士に促され、ハナはなにもないほうの机の腰掛けに座った。

「お荷物をお持ちでないようでしたので、取り急ぎベッドの準備だけいたしました」
「ベッド？」

ハナが首を傾げると、老紳士は脚のついた寢床のことだと教えてくれた。

「寝巻きや着替えは机の隣の引き出しの中に。そちらは自由にお使いください。その他、分からないことがあればなんでもお聞きください。私の部屋は一階の、戸口のすぐ隣です」

老紳士はにこやかにハナに告げる。

「えっと……今日は、これからどうしましょう？」

「今日はお休みになるようにとほっちゃんより言付かっております。明日は朝七時に

戸口の外へ。使用人が集まりますので、そちらにお越しく下さい。では」
ハナの問いにそう答えると、老紳士は頭を下げ出ていこうとする。

「あ、あの、ありがとうございました！ えつと……」

「私はぼっちゃんの執事、畠中と申します。はたなかここでは執事長とお呼びください」
執事長はにこりと微笑むと、今度こそ部屋を出ていった。

ハナは部屋にひとりになった。

もう夕方らしい。柿色の光が、窓から差し込んでいる。

ハナはベッドをちらりと見た。

（本当に、こんなお布団で寝てしまつていいのかしら？）

ハナは好奇心に負けて、おそろおそろベッドに触れた。馬車の座席よりは硬いが、それでもハナが田舎で寝ていたものより何倍も柔らかい。

「うわあ……」

ハナはそこにそつと腰を下ろすと、たまらずそのまま横になった。

（ふわふわで、気持ちいい）

弱つた自分の心を包み込んでくれるようなベッドの心地に、ハナはつい目を閉じる。
そのまま、帝都に来てからの怒涛の一日を思い返した。

（鷹保様。助けてくださったけれど、不思議なお方ね。公爵家の方でありながら、走っ

て逃げだすなんて。それでいて、あんなふうなこと——）

ハナは彼の艶めかしい笑みを思いだしてしまい、ふるふると頭を振った。すると今度は、彼の寂しそうな顔が脳裏をよぎる。先ほどの出来事はからかわれただけなのか、それとも彼はなにかを抱えているのだろうか。

眠るつもりはなかったが、体も心も疲れていたらしい。ハナは考えているうちに、いつの間にか深い眠りに落ちていた。

「エクスキューズ、ミー？」

可愛らしい女性の声がある。聞いたことのない言葉をかけられ、ハナの意識は浮上した。

重たいまぶたをゆつくりと開けると、女性に顔を覗かれていた。緑色の瞳、輝くような金色の長い髪。歳はハナと同じくらいに見えるが、白い肌はとても日本人のものとは思えない。

一気に意識が覚醒し、ハナは飛び起きた。

「よかった、起きたのね」

彼女はそう言うのと、向かいのベッドに戻ってゆく。

ハナはベッドに腰かけたまま、彼女を視線で追った。濃い緑の着物に臙脂色えんじの前掛

けをした彼女は、両手で髪をすくい上げまとめ始める。

「私、ハナと申します！」

ハナは同じ部屋に住んでいるらしい、彼女の背中に向かって声を張った。

「あら、日本語喋れるのね」

彼女はそう言いながら、ハナを振り返る。ハナは、彼女のほうが日本語を喋るのが不思議だと思った。すっと通った高い鼻も、頬にあるそばかすも、日本人らしくない。「私はリサ、この女中なの。あなたも早く着替えたほうがいいわ。じきに七時になるもの」

「え……?」

「使用人は毎朝七時、外に集合。昨日、そう教わらなかった?」

思わず疑問を漏らしたが、彼女の声ではとした。昨日、執事長に同じことを言われた。

「あ、ありがとうございます！」

ハナは慌ててベッドから飛び下りた。

（確か、机の隣の引き出しよね）

ハナは引き出しの中に、リサが着ているものと同じ着物を見つけた。慌てて着替え、さっと髪をまとめると、部屋を出ようとしていたリサの後ろに続く。

「ご一緒させていただいてもいいですか? 私、働くのも初めてで」

「ふふ。あなた、面白いわね」

リサはハナを振り返って言う。その愛らしく優しい笑みに、ハナはここでの生活はうまくやれそうだと感じた。

集まりに向かう間、ハナはリサからいろいろなことを聞いた。

使用人同士は、仕事中はあまり話さないようにすること。分らないことは執事長や女中長に聞くこと。女中はハナも入れて五人いるが、女中長は厳しい方なので特に気をつけること。真面目に仕事をしていれば、お給金もきちんともらえること。

リサはお給金で「化粧水」を買ったと楽しそうに話してくれたが、ハナはそれがないに使うものなのか、皆目見当がつかなかった。

「鷹保様は、どんな方ですか?」

会話の流れでそう聞くと、リサは笑みを浮かべたまま答えた。

「旦那様は、とても優しい方よ」

それで、ハナは首を傾げた。

（鷹保様は、リサさんには優しいだけなのかしら?）

使用人の集まりにはハナやリサと同じ恰好の女中が他に三人おり、その中で年配の

眼鏡の女性が女中長だと紹介された。朝食の準備で今はいないが、料理人もふたりいるらしい。

集まりは、執事長と女中長が取り仕切っていた。最初こそなにも聞き漏らすまいと意気込んでいたハナだったが、徐々に女中長の口の速さについていけなくなってしまう。それどころか、ハナの意識は途中から女中仲間に向いていた。女中は女中長以外みな、異国的な風貌だったのだ。

リサは金色に輝く髪が綺麗だが、他のふたりも色素の薄い茶色い瞳や淡い栗色の髪が綺麗だ。ハナは自分の黒髪が恥ずかしくなる。

ハナは自分の前髪に触れながら、つい考えてしまった。

（みな、お人形のような顔をしているわ。なのに、私は……）

「——さん、ハナさん！」

ため息をこぼしそうになった時、耳元で大きな声で名を呼ばれた。はつと振り返ると、鬼のような形相の女中長が立っている。

「集まりはとづくに終わりましたよ！」

左右を見ると、先ほどまで周りにいたはずの女中たちはいなくなっていた。ハナだけがぼつりと取り残されている。

「すみません！ みな綺麗な人ばかりで、驚いてしまった」

しどろもどろになっていると、女中長はすつと目を細めてハナを見た。

「あなただって、綺麗な青い瞳をしているじゃない」

「え？」

思わず聞き返した。自分の瞳の色など、意識したことがなかったからだ。

ハナは田舎で何度か見た、水に映った自分の姿を思いだす。そういえば、瞳が青かったかもしれない。

「無駄話は終わりよ。ハナさんは今日からここの女中として、立派に勤めていただきますからね！」

女中長は早口でそう言くと、眉間に皺を寄せる。

「はい！」

ハナは思わず姿勢をしゃんとし、そう答えた。

「ハナさんには、ここの屋敷の大体の部屋を覚えてもらって、それから掃除に入ってもらいます。いいですね」

女中長はそう言くと、くるりと体の向きを変えさつさと歩きだす。

「ぼさつとしてないで、ついてきなさい！」

その声の強さに一度ぴくりと肩を揺らし、ハナは慌てて女中長の後についていった。鷹保郎というこのお屋敷の中は、広いが単純な造りだった。本邸の一階は大部分が

大広間で、その他は応接間と中庭、そして申し訳程度に厨房と小さな使用人室がある。使用人はそこで食事を取るらしく、朝食がまだだったハナは残っていた握り飯をいただきますながら、二階の説明を受けた。

二階には鷹保の執務室と客間があるらしい。倉庫もそこにあるらしいが、執務室周辺は立ち入ってはいけないということだった。

また本邸とは別に、使用人棟の向かいには別邸がある。そこは鷹保の居住空間で、そこにも許可なく立ち入ってはいけないと教わった。

「ハナさんには覚えてもらいう意味も込めて、しばらくは本邸の掃除をしてもらいます。今日は廊下の掃除を。用具は二階の倉庫にあるものを使うように」

女中長はそれだけ言うと、まだ握り飯を頬張っていたハナを置いて使用人室を出ていった。

ハナは急いで握り飯を口に含んで飲み込み、ぺちつと両頬を軽く叩いた。

（せっかくだいたいたお仕事。村のみながくれたものとは違うけれど、今日からはここで頑張らないと）

帝都で生きてゆくため。父母のため、育ててくれたみなのため。ハナは意気込みとともに立ちあがり、使用人室を後にした。

しかし、本邸の階段を上り二階に着いたところで、ハナは立ち止まった。

（どっちだったかしら？）

執務室は昨日訪れた場所だろうと、女中長の説明で見当がついた。しかし、昨日は鷹保に手を引かれるまま歩いたので、階段を上った先で右に行くのか左に行くのか分からなくなってしまったのだ。

（きつと、こっちね！）

ハナは当てずっぽうで、階段の先を右に曲がった。正面に見えた廊下の突きあたり窓は、なんとなく見覚えがある。

（こっちは昨日来たほうなのね。それなら、倉庫は反対側だわ）

そう思い背後を振り返る。しかし、そちらにも同じような廊下と窓があった。

（ああ、本当に分からない！）

ハナは半ばやけっぱちになりながら、女中長から聞いた通りに廊下の左側の扉を開いた。

中はやたら明るい。倉庫と聞いていたから、薄暗いものだと思い込んでいた。

だが、それは間違いだとすぐに気づいた。見覚えのある机、書棚、革張りの長椅子が目飛び込んでくる。

「ここは鷹保様の執務室だわ！」

ハナは焦った。執務室周辺は立ち入ってはいけないと、女中長に言われたばかりだ。

鷹保は不在らしい。そのことにハナはほんと安堵の息をつく、後ずさり部屋から出ようとした。

しかしなにかが足に触れ、かたんと音を立てた。ぴくりと体を震わせ足元を見ると、くずかごが倒れていた。中から、くしゃくしゃになった紙くずがはみだしている。

「これ、お手紙かしら？」

ハナはくずかごをもとに戻しながら、拾った紙くずを見て考えた。封が開いていない。普通は中を見ないで捨てるなんてことはしないはずだから、もしかしたらくずかごでないところにあつたものかもしれない。

「どうしましょう」

（とにかく、中身を確認できるようにしておきましょう）

ハナは床に膝をついて、手紙の皺を丁寧には伸ばした。

「なにをしているのかな、おひいさま」

突然背後から聞こえた声に、ハナの体はぴくりと大きく揺れる。そのはずみで、手紙の封が一部破けてしまった。

（しまった！）

背を向けていた扉のほうを、おそろおそろ振り返る。優しい笑みを浮かべた鷹保が、そこに立っていた。

ハナは彼の表情に安堵し、慌てて立ちあがり口を開く。

「申し訳ありません。屋敷内で部屋が分からなくなってしまい、間違えて入ってしまった」

ハナはそう言くと、手紙を手にしたまま頭を下げた。

「その手紙、なぜ拾った！」

彼の声色が突然怒号に変わり、はっと顔を上げた。

鷹保はひどく怖い顔をしていた。眉も目尻もつり上がり、それは腹の底からの怒りを表しているようだ。先ほどまで微笑んでいたとは、到底思えない。

（どうしましょう。鷹保様、とても怒っていらつしやる）

ハナは恐怖から、思わずこぶしを握った。すると、手にしていた手紙がくしゃりと音を立てる。その瞬間、鷹保の剣幕がいっそう激しくなった。

鷹保はそのまま、ハナに一步近づく。ハナは思わず後ずさった。

昨日の、財前の怒り狂った顔が彼に重なる。粗相のせいで、この邸宅から追いだされてしまうかもしれない。そうしたら、帝都へ来たばかりのハナには行くところがない。

「どうかお許してください。くずかごを倒してしまっただけなんです」

ハナはさすがの思いで鷹保を見上げた。鷹保は眉間に皺を刻んだままの鬼のような顔

で、ハナを睨むように見つめている。しかもそのまま、こちらとの距離を詰めてくる。ハナは鷹保に合わせて、一歩ずつ後ずさった。こみ上げる恐怖と罪悪感で泣きそうになったが、鷹保の厳しい目つきはハナに目を逸らすことを許さない。

鷹保はじりじりとハナに詰め寄る。じきに、ハナの背中は壁にとんと当たってしまった。

(どうしよう、これ以上は……)

逃げ道を失ったハナは、まだ詰め寄る鷹保に怯え震えた。次の瞬間、鷹保はハナの顔のすぐ横の壁にどんと強く手をつく。思わず肩が大きく震え、ひっと息をのんだ。

「見たのか？」

鷹保の鋭い眼光に、ハナはうまく喋れなくなる。すると鷹保は声を荒らげ、怒鳴るように言った。

「見たんだな！」

ハナは恐怖におののき、身を縮こませる。すると鷹保は顔を近づけ、低く小さな声で囁いた。

「いいか、誰にも言うな」

その声色には、秘密を守らせるための切迫感がある。ハナはなんのことだか分からないまま、必死に頷いた。

すると、鷹保はすぐにハナを解放する。

「その手紙は紙くずだよ、おひいさま」

彼の声色が急に優しくなる。

鷹保は先ほどと同じ、優しい笑みを浮かべていた。だがその笑みが、今は怖い。

鷹保に手を差し込まれ、ハナは震える指で手紙を渡した。するとすぐ、鷹保は手紙を胸元にしまう。

「いくらおひいさまでも、女中は勝手に執務室に入ってはいけないよ？」

鷹保は流れるように戸を開けて、ハナに外に出るよう促す。

「またね、おひいさま」

ハナが廊下に出ると、鷹保は微笑んだまま執務室の戸を閉めた。

ハナはそこで、やっと胸を撫でおろした。だが先ほどまでのことを思いだし、体がぶるりと震えてしまう。

(昨日はからかわれただけだったけれど、あんな顔で怒ったりもする。かと思えば、あの笑顔。鷹保様は、本心を見せないお方なのね)

優しいばかりの人だと思っていたわけではないが、まさかあんな剣幕で叱られるなと思ってもみなかった。思いだしたら再び震えてしまい、ハナは両腕で自分を抱きしめる。

立ち読みサンプル はここまで

だが、執務室に入ってしまったのは自分の不注意だ。仕事をなくさず済んだだけ、よかったじゃないか。

（もう、絶対に間違えないようにしよう。あの手紙のことも忘れましょう）

ハナはそう心に誓って、廊下の反対側にある倉庫に向かった。

掃除の仕事をこなし、同室であるリサとともに夕飯を食べて使用人棟に戻った。寝支度を整え、ベッドに横になる。すると同じく横になったリサが話しかけてきた。

「ハナさん、一日目はどうだった？」

（どう、と聞かれても……）

ハナは困ってしまった。

朝一の事件の印象が強すぎて、その後は必死にそのことを忘れようと掃除に動しんだ。しかし、使い慣れない用具で廊下を掃除するのはハナには至難の業だった。結局、雑巾一枚で拭き掃除をするだけで終わってしまった。

「帝都はすごいなあって、思いました」

ハナは少し考えてからそう答えた。

「なにそれ。あなた、本当に面白いわね」

リサは言いながら、くすくす笑った。

「生まれはここじゃないのね」

「はい。ここより北の、山の中の小さな村で育ちました」

「へえ」

リサは相槌を打つ。ハナはリサのほうへ顔を向けた。彼女は仰向けのまま、天井を見ている。

「帝都はいいところよ。憧れが詰まっているもの。どんなにどん底にいても、すくい上げてくれる」

そう話すリサの表情はきらきらしていて、ハナは見惚れてしまった。

「リサさん、お仕事はつらくないのですか？」

ハナは思わずそう聞いた。あんなに恐ろしい笑みを浮かべる主のもとにいるのに、帝都に希望を持っている。それが不思議だったのだ。ハナは帝都に来てから、恐ろしいことばかりに遭遇している。

だがリサは、きらきらした顔のままハナを振り向いた。

「つらいなんてあるわけじゃない。お給金で好きなものが買えるし、なにより旦那様がとてもお優しい方だから。鷹保様に仕えることができて、心から幸せだと思っわ」

「そう、ですか……」